核の苦悩なくしたい

多くの命を奪い、生き延びた人々も苦しめる広島への原爆投下から73年。６日に広島市の平和記念公園で開かれた平和記念式典に、愛媛県の遺族代表として松山市北条辻の会社員梶野平太さん(46)が出席した。今年２月に96歳で亡くなった祖母の梶野清子さんら原爆の被害者を思い、平和の尊さを胸に刻んだ。

（１面参照）

平和記念式典 遺族愛媛代表 梶野 平太さん(46)＝松山

遺伝的影響 心配いつも

被爆した祖母清子さん2月に96歳で死去

祖母ら原爆に苦しんだ人々を思い原爆死没者慰霊碑の前で手を合わせる梶野平太さん＝６日午前９時ごろ、広島市

１９４５年８月６日、当時24歳だった清子さんは爆心地から約１キロ離れた自宅で被爆。１歳の長女が在宅していたほか、清子さんのおなかには長男で平太さんの父・剛さんがいた。

清子さんは生前、愛媛新聞の取材に被爆の状況を語っている。原爆がさく裂した直後に意識を失い、気が付くとがれきの下敷きになっていた。何とかはい出すと、周囲の火災から逃れるため長女と自宅裏の川に飛び込んだ。

川を出ると、助けを求めて変わり果てた街を必死で歩いた。そばを歩く人がばたばたと倒れたが、気の毒に思う余裕はなかった。夫と会うことができ、島根県境にある知人方に避難。だが、ひどいけがをしていた長女は約３週間後、息を引き取った。清子さんは取材に「悲しみを通り越し、怒りが湧いた。どうして私の子どもが、罪のない子がこんな目に」と当時の心境を振り返っている。

清子さんは45年11月に剛さんを出産。47年、49年には次女と三女が生まれ、夫の郷里松山に移った。平太さんの知る限り、清子さんが再び広島を訪れることはなく「行きたくない」としきりに話していたという。

被爆体験はほとんど語らなかった。幼かった平太さんが質問してもあまり答えてもらえず、いつしか話題にしなくなった。祖父の被爆や父の胎内被爆も長く知らなかったという。ただ、清子さんらが苦悩していたことは分かる。剛さんは81年、腎臓病で35歳の若さで亡くなった。清子さんは胎内被爆との関係を疑い、孫ら家族への遺伝的な影響も心配し続けた。

６日、今は亡き家族や犠牲者の冥福を祈った平太さん。原爆死没者慰霊碑に献花し「安らかに眠って」と静かに手を合わせた。式典後「戦争や核兵器がなくなってほしいと改めて感じた」とし、２人の息子の父として「子どもには（戦争や被爆の）苦難が降りかかってほしくない」とかみしめるように語った。

（桑原大輔）

(C) 愛媛新聞社 無断転載、複製及び頒布は禁止します。